

ロシア・ウクライナ情勢の影響(第 2 報)

ロシアのウクライナ侵攻後、アゼルバイジャンの国内情勢は引き続き落ち着いており、外政や経済の面では安定した対応が見られます。

1. アゼルバイジャンは、欧州、ロシア、トルコ等に対するバランス外交を展開中です。欧州に対しては、EU及び欧州各国から天然ガス供給増の要請が相次ぐなど、資源国としての存在感の向上に成功しています。ロシアとは、同盟的交流宣言(2月22日署名)及び政治・経済・社会的な関係の深さに鑑み、同国への非難、制裁に加わらず従来関係を維持しつつも、その国際的孤立や影響力低下の成り行きを慎重に見極めていく模様です。トルコとは、そろって今次紛争の仲裁を申し出るなど、「兄弟国」としての同盟関係(昨年シュシャ宣言で確認)を改めて国際社会へアピールしている点が注目されます。

2. 経済面では、原油・天然ガス価格の高騰が、輸出・外貨収入の増加を通じ、アゼルバイジャンの国家財政上の大きなボーナスとなります。1 ドル/バレルの油価上昇が国家石油基金(SOFAZ)に 1.3 億ドルの増収をもたらすと予測もあります。(参考:今年度予算の歳入総額約 158 億ドル、うち SOFAZ 納入金約 75 億ドル(1ドル=1.7 マナトで換算)、同予算での想定油価 50 ドル/バレル。上記予測に基づく今年の平均油価110ドル/バレルの場合 SOFAZ の増収分 78 億ドル。)

ロシア・ウクライナ貿易に係る支障、両国在留アゼルバイジャン人や出稼ぎ労働者の困窮、彼らの本国帰還による労働市場の混乱、小麦・パン価格の上昇等の影響が徐々に現れてくることが予測されますが、アゼルバイジャン政府は上述の国家財政上のボーナスを以て各種懸案に対処可能と考えているのかも知れません。

3. 物流に関しては、アゼルバイジャンとロシアの間の陸送(通関)は通常通り運行されている模様です。なお、中国・中央アジアから欧州向け物流のうち、ロシア・ベラルーシ経由ルートが今次紛争の影響で滞ることが予測されます。既にこの代替ルートとして、カザフスタン発貨物をカスピ海・バクー港経由で輸送するケースが見られる旨の報道もあり、ロジスティックハブとしてのアゼルバイジャンへの注目が高まる可能性があります。

(以上)